

## ポスト・アンコール期の王都ロンヴェークと対外貿易

——出土陶磁器からの検討——

佐藤 由 似

はじめに

ロンヴェーク (Longvek) は、カンボジア王朝年代記 (Maik 1984, Sok 1988) によると、ポスト・アンコール期と呼ばれる時代にあたる一六世紀に王都として存在したと記載されている。ポスト・アンコール期とは、一四三一年のアンコール陥落後、一八六三年にフランスの植民地地下に入るまでを指す。この概念自体が、フランス植民地期に与えられた歴史観であり、栄光の時代であるアンコール期以降、「カンボジアという国家が衰退し、現在の状態に陥っていく過程として叙述され」た (北川二〇〇六)。しかし、既に先行研究で述べられている通り、カンボジア王朝年代記は一八世紀末以降に書かれたものであり、一六・一七世

紀に関する記述内容そのものの信憑性を問わざるを得ない状況である (北川一九九八)。文献史料研究に限界がある中、ポスト・アンコール期カンボジア史研究には考古学が有効であると考えられたことから、二〇〇五年奈良文化財研究所とカンボジア文化芸術省は初めてポスト・アンコール期に関する考古学的調査を始めた。筆者は二〇〇七年度より奈良文化財研究所のカンボジアプロジェクトの一員として調査に主体的に参加し続けている。

本稿では、ポスト・アンコール期遺跡のうち一六世紀の王都として機能していたとされるロンヴェークを対象遺跡とする。ロンヴェークは、ポスト・アンコール期の都として認識されながら、一度も考古学的調査がおこなわれることがなかった。しかし、土塁や堀等が良好な状態で残って

いることが判明し、考古学的手法による研究がポスト・アンコール史解明の一助となることが期待された。本稿は、ロンヴェークにおける初の考古学的な発掘調査<sup>①</sup>の成果で得られた出土遺物の産地・年代同定等の基礎的な調査成果に基づいている。出土陶磁器の分布や地点ごとの組成分析等から、衰退期と片付けられていたポスト・アンコール期の王都ロンヴェークの実態と当該期カンボジアの社会・経済の実像に迫ってみたい。

## 1. 先行研究

ロンヴェークに関する先行研究は主に王朝年代記を用いた歴史学的見地によるものが殆どである。王朝年代記によれば、一四三一年アンコールが終焉したのち、王がスレイ・サントー (Srei Santhor) / プノン・ペン (Phnom Penh) / ポーサット (Pursat) / バリボー (Barbaur) と転々としたのち、一五二九年にロンヴェークに居を定めるが、陥落後は紆余曲折ののち一六二〇年、ウドン (Oudong) へ遷都を余儀なくされたという (図1)。ロンヴェークは、アン・チャン一世 (チャン・リエチエ) (一五一六 / 一五一七 - 一五二六 / 一六六六) により造営された (Sok 1988)。一六世紀中葉にはラオ軍が侵攻、一六世

紀末にはアユタヤによる度重なる攻撃により一五九四年にナレースエン王の攻撃により陥落、サター王はスレイ・サントー経由でラオに脱出したといわれる (Leclère 1914, Mikaelian 2012)。

フランス植民地期以降、栄華を極めたアンコール期と比して、周辺勢力からの圧力に屈した「ポスト・アンコール期 = 衰退期」という方程式が定型化していった (Groslier 1958)。一方、王朝年代記の信憑性に批判的なヴィッカーリーは、カンボジアの王朝年代記・タイ側の年代記双方に加え諸外国の同時代史料を検討し、アンコールからロンヴェークやスレイ・サントーへの遷都は衰退ではなく、交易に適した土地への移動による (Vickery 1977) と唱えた。一九九六年にロンヴェーク現地を踏査した北川は中心寺院ワット・トラエン・カエン (Wat Traleaen Kaeng) やブレア・アン・テープ (Preah An Tep) 寺院等において、踏査だけではなく現存する伝承を採集している (北川二〇〇六)。北川は、王朝年代記の検討に留まらず、ロンヴェークにはポスト・アンコール期以前の伝承や痕跡が残されていることにも着目した。これに関してはセデスによる碑文集成にプレ・アンコール期、アンコール期碑文の存在がまとめられている (Coedès 1942: 115-118 [K.137], Coedès 1942: 119-120 [K.432], Coedès 1954: 284-286 [K.136],

北川二〇〇六)。また、ポーサットやバリポー等アユタヤ側と繋がるトンレサップ湖南西岸道沿いに王朝年代記関連の伝承が残ることも突き止めた。このように歴史学者による先行研究により、周辺勢力との抗争の中、ロンヴェークはブレ・アンコールにまで遡る歴史を持つ土地であり、交通の要衝ともなりうる立地にあることが判明し、その実態解明のため、より実証的な考古学的手法による現地調査が必要とされたのである。

## 2. ロンヴェークの遺構

### 2-1. ロンヴェークの地理的環境

ロンヴェークは、現在の行政区分ではコンボン・チュナン (Kompong Chhnang) 州コンボン・トロラツ (Kompong Tralach) 郡に属し、プノン・ベンから約四〇km北上したトンレサップ川西岸地域にある台地状の微高地上に位置している (図1・2)。トンレサップ川はトンレサップ湖を起点とし、プノン・ベンでメコン川と合流し、メコンデルタへと流れる。また、ロンヴェーク地域にはまるでロンヴェークを囲むように台地南西隅と北東隅を結ぶ小川が流れている。この小川はロンヴェークの北東隅ではおそらく人工的に流路を改変され、トンレサップ川へとまっ

すぐ注ぐ。この小川とトンレサップ川との合流地点を踏査したところ、「コンボン・ロンヴェーク」つまり、「ロンヴェークの港」と村人から呼ばれていることが判明した。ロンヴェークは、「バンテアイ・ロンヴェーク (ロンヴェークの砦)」と村人から呼ばれる。その名が表す通り、北・南・西側三方を土塁と堀で囲んだ堅牢な造りである。

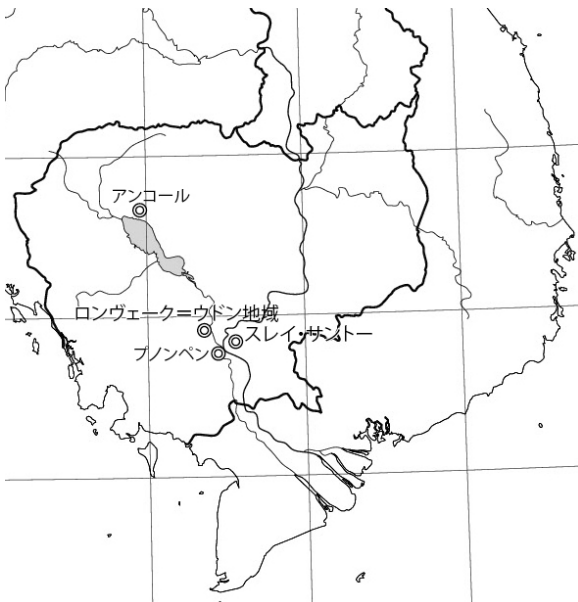


図1 カンボジア地図

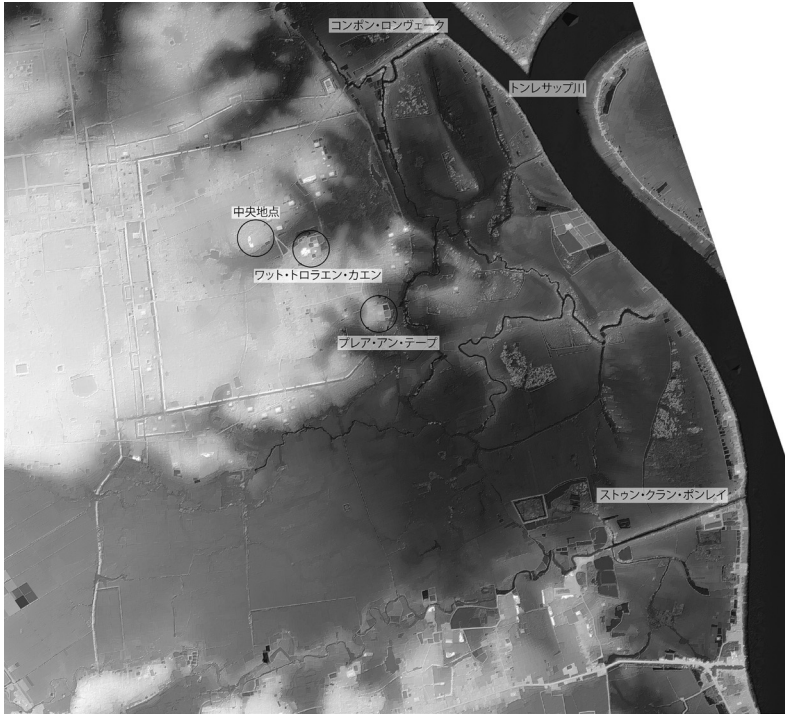


図2 ロンヴェークLIDAR画像



図3 ロンヴェーク衛星画像  
(Google earth)

東側土塁は、かつて他の三方と同様に土塁が存在していた可能性があるが、現在アスファルトで舗装された道が敷かれ、現状では確認することが困難である。この東側は台地の落ち際にあたり、トンレサップ川の氾濫原に面していることから、天然の要塞ともいえる地勢である。一六世紀にロンヴェークを訪れたクルスの記録によると、「小高い城塞」とあり（クルス著、日整編訳一九九六）、トンレサップ川を遡上する船からも容易に判別できるほどの良好な立地にあった。

## 2-2-2. ロンヴェークの構造

ロンヴェークに関する衛星写真により、土塁等主要な構造は確認できたが、二〇一五年からの発掘調査に先立ち、ロンヴェークとその南方約7kmに位置する一七世紀以降の王都ウドン地域と合わせ、LIDARによる測量をおこなった(図2)。これにより、衛星写真(図3)では知り得なかった、新たな構造が発見された。

## 2-2-1. 土塁

ロンヴェークの土塁は、南北約二・五km、東西約二kmを測り、南側を除いた西側と北側の土塁が三重となる。ここでは、最も内側の土塁から第一土塁、第二土塁、第三土塁

と呼ぶ。第一土塁から第二土塁にかけての南西隅には東西約四八〇m、南北約二〇〇mの出隅状に張り出した区画が存在する。さらにLIDARによる調査で、第二土塁西辺に五か所、北辺に三か所の砦状の張り出し部が形成されることが判明した。土塁の高さは地点によって差異はあるが、約八mから一〇m、幅は約二五mでその外側に並行して同じく約二五m幅の堀が走る。南辺土塁には、一か所村道により切り取られた箇所があり、良好な状態で断面を観察できる。断面の状態から、土塁はレンガやラテライトを使用することなく、粘土質の土と砂質土を互層に積み重ねた構造であることが読み取ることができる。

## 2-2-2. 上座仏教寺院

ロンヴェーク域内には複数の寺院が存在する。その全てが上座仏教寺院で、現在までのところ、約三〇か所存在することが判明している。これらの寺院は大きく分けて二種類に分類される。一つは伽藍を形成するタイプの上座仏教寺院で、本堂・僧院・講堂・ストウーパ・池が伽藍内に配置されるのが一般的である。ロンヴェーク域内で最も重要視され(北川二〇〇六)、中心寺院としての役割を担っているのが「四面仏の寺」という意味を持つワット・トローエン・カエンで、ロンヴェーク域内のほぼ中央に位置す

る。現在の本堂には、後世に造像された東西南北の四方を向く釈迦如来立像があるが、その足元に当初仏である四面仏の砂岩製の足材がそれぞれ四面に残されている。このワット・トラエン・カエンに並んで重要とされるのがロンヴェーク南東隅にあるワット・ブレア・アン・テーブ (Wat Preah An Tep) であり、ロンヴェーク期から続く寺院である (北川一九九八)。

もう一つが、いわゆるテラス寺院と呼ばれるタイプである。アンコール遺跡群のアンコール・トム内にも多く確認できるが、伽藍を形成せずに、本尊を祀ったヴィハラとその手前に平面長方形の簡便なテラス状の張り出し部を造り、これらをシーマ石 (結界石) と呼ばれる二石一組の装飾石で寺域を区画するものである。ロンヴェーク内のテラス寺院はその殆どがマウンドの上に造営されている。これらテラス寺院は、ワット・トラエン・カエンの東側や、南辺土塁周辺に多い。両タイプの上座仏教寺院とも「生きる寺」であり現在もロンヴェーク住民の信仰の対象である。

## 2-2-3. 都市プランの検討

アンコール遺跡群のうち、ジャヤヴァルマン (Jayvarman) 七世が造営したアンコール・トム (Angkor Thom) は一辺3kmのはほぼ正方形を呈した土塁と堀に囲まれた都であ

る。城壁内には東西南北に道が計画的に配置され、各出入り口には砂岩造の門が造営されている。城壁の中央部には、バイヨン (Bayon) 寺院が聳え、その北西には王宮が位置する。また、城壁内には道路網に沿って運河が巡っていたことが最近の研究で明らかになっている (Gaucher 2004)。緻密な計画のもとに築き上げられた都であると言えよう。

一方、アンコール陥落から約百年後に造営されたとされるロンヴェークは、アンコール・トムと同じく土塁と堀に囲まれた方形の都で一見すると類似した構図を持つ (図4)。しかしながら、城壁内には当時の道路網はおろか王宮位置も不明であり、アンコール・トムのような明確な城門等の開口した出入口がない。水利施設に関しては、域内では判然とせず、土塁と並行して堀が巡らされ、さらに城壁外の台地下には小川が張り巡らされている。

ただ第一土塁は東西約2km×南北約2.5kmの堅牢な土塁で比較的アンコール・トムに近似した構造を呈している。第二土塁は西辺と北辺に砦状の張り出し部を一定間隔で配置、第三土塁の西辺は城壁南西部から南に延伸し、現在のウドン市街地まで繋げられている。これらのロンヴェークの三重土塁は一度に形成されたものではなく、複数期にわたって築造されたのではないかと現段階では考え



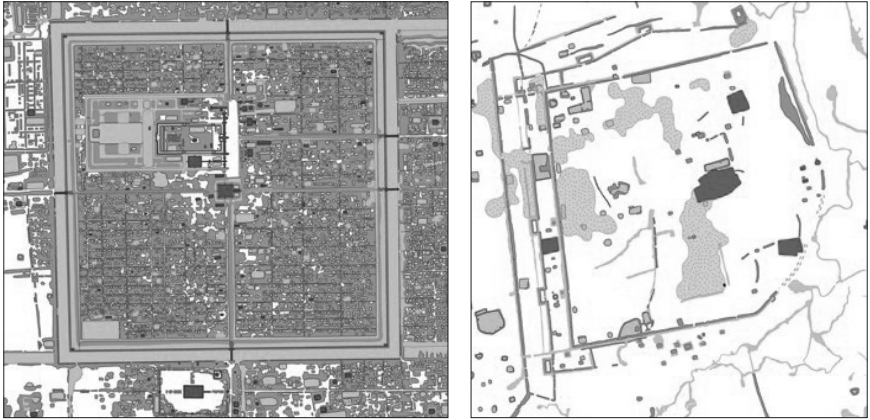


図4 ロンヴェーク（右）とアンコール・トム（左）都市構造の比較（CALI Initiative）

る。最もシンブルな造りながら堅牢な土塁である第一土塁が最も古く、第二土塁で拡張、砦を取り付け、第三土塁でウドン市域まで南へ延伸させたという仮説である。

ロンヴェーク域内にはプレ・アンコール期以前にまで遡る碑文（第1章参照）、ならびにワット・トラエン・カエン内には砂岩造・ラテライト造構造物が残っており、少なくとも一六世紀ロンヴェーク遷都以前には既にこの地に寺院等の構造物が存在していた可能性が高い。土塁の具体的な構築時期については放射性炭素年代測定等の科学分析、建築史的視点からの都市構造研究等が必要不可欠であることから、今後の課題として残る。

### 3. 出土陶磁器の検討

ロンヴェークでは、実に豊富な量の陶磁器片が出土している。本章では、ロンヴェーク中央地点、ワット・トラエン・カエン寺院地点出土遺物をそれぞれ検討し、最後にロンヴェーク域内表採遺物との比較をおこなう。

#### 3-1. 中央地点出土遺物

ロンヴェーク中央地点は、ロンヴェーク域内のほぼ中央に位置し、中心寺院であるワット・トラエン・カエンの

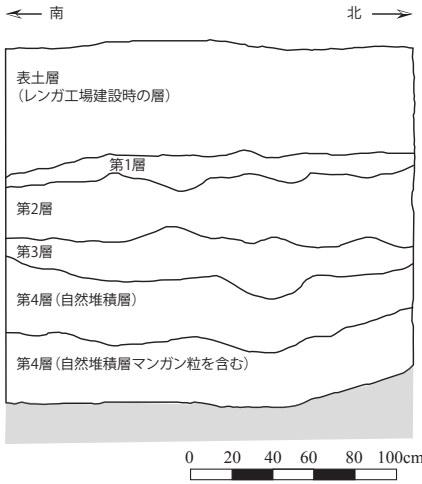


図5 中央地点トレンチ西面層序

北西にあるやや小高く開けた地区に立地している。その披群の立地環境から、調査開始当初よりロンヴェーク域内において重要な地点であることが見込まれていたが、残念なことに当該地点には二〇一二年頃にレンガ工場が建設され、現在に至るまで退去することなく操業が続いている。そのため、考古学的な調査範囲は限られるものの、二〇一八年一月の調査において、約一〇四㎡のトレンチ調査をおこなうことができた(図5)。自然堆積層の上にある文化層である第3層の遺構として小型炉跡一基、小型の柱穴三基を検出したが、これらの遺構から年代比定可能な遺物は

検出されていない。また土器や陶磁器をはじめ動物骨等が黒色の堆積層から大量に出土した。第1層と第2層からは明瞭な遺構は検出されておらず、表土層と第1層の一部は現代のレンガ工場による攪乱を受けている。

トレンチから出土した陶磁器・土器の総点数は一〇六二点(破片数)。同一個体は一点として換算)にのぼり、このうち貿易陶磁器は四四七点、陶器一二〇点、土器一〇〇五七点が出土している。貿易陶磁器に関しては、第1層から四二点、第2層から四四点、第3層から三六一点を検出した。とりわけ第2層と第3層からは、青花では景德鎮産の連子碗や碁笥底の碗等に代表される一六世紀初頭から中頃にかけての一群、大明年造銘や饅頭心碗等を含んだ一六世紀後半から一七世紀前半にかけての一群が観察された。白磁では碗・皿が最も多かった。第3層からは景德鎮産の上質な白磁の特殊品も確認された(図6-1)。口縁は玉縁状に作られ、外面にはドット状の細かな貼付文が丁寧に施され、下部には脚状の突起が取り付く。一点の破片のみの出土のため、全体の器形を知ることが叶わないが、特殊な器物とみられる。色絵製品としては景德鎮産の古赤絵と呼ばれる一六世紀前半から中葉の嘉靖年間頃の皿や、一六世紀末から一七世紀前半に位置付けられる漳州窯産の色絵鉢等が確認された。陶器では、華南三彩の皿も確認した



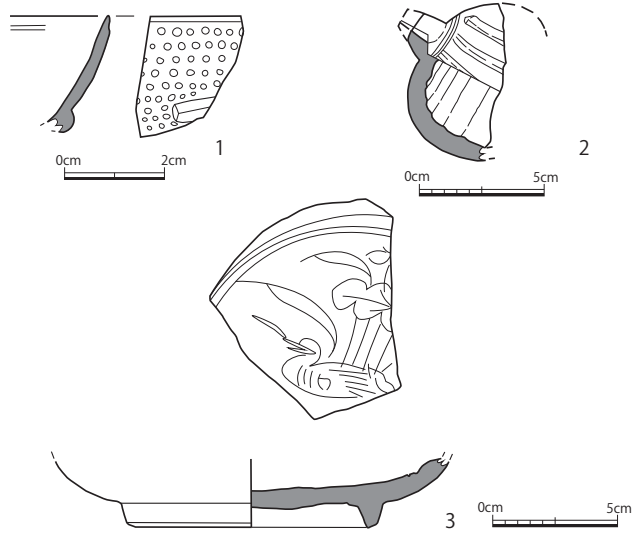


図6 中央地点出土遺物

表1 中央地点出土  
貿易陶磁年代観

年代	点数
16世紀初頭－ 中頃	103
16世紀後半－ 17世紀前半	335
18世紀	3
不明・現代	6
合計	447

(図6-3)。素地に白泥をかけ、その上に紫・緑・黄色で彩色を施し、見込には陰刻で蓮池水禽を表す。一六世紀後半から一七世紀初頭頃のものと考えられる。また褐釉陶器印花文蓋の外表面は褐釉地に印花文で吉祥文が施され、内面には調整痕の叩き目がはっきり残る。他地域での出土事例が少なく、日本では堺環濠都市遺跡(SKT263)出土の一破片と(堺市立埋蔵文化財センター二〇〇四)、やや時代が下るタイプで長崎市興善町遺跡出土(長崎市教育委員会二〇一一)の事例とが知られる。土器は粗製のものから上質なものまで多くのヴァリエーションが認められたが、特筆されるのはタイ産の黒色磨研土器で、ケンデイの注口部分である(図6-2)。特徴的な装飾が施されており、日本では長崎の築町遺跡等で出土例がある(長崎市教育委員会一九九七)。

当地点出土陶磁器の年代観は、一六世紀前半から中頃のグループと、一六世紀後半から一七世紀前半に比定されるグループを確認した(表1)が、第2層と第3層とにまたがって検出され、一連の活動の中で形成されたと考えられた。この年代観は、一点の疑問を想起させる。王朝年代記で返す返す唱えられてきた一五九四年のアユタヤ王朝のナレースエン王によるロンヴェーク攻略に関連するような画期を当トレンチから見出すことができなかったのである。

少なくとも当トレンチからは、明らかな焼土層や武具・人骨の類が検出されることは一切なく、また一六世紀末で途端に文化層が途絶えるような事象も確認することができなかった。少なくとも陶磁器からは一七世紀前半までを中心とするまとまった量の遺物が出土し、数点のみ一八世紀に入る徳化窯系の青花が上層である第一層から確認されていることから、一五九四年にアユタヤによりロンヴェークが攻略されたという記録が事実であったとしても、陶磁器の年代観とは厳密には合致しないことが明らかになった。

### 3-2. ワット・トロラエン・カエン

ワット・トロラエン・カエンはロンヴェークの中心からやや東寄りの高台に位置している。寺院の沿革については、北川による記述が詳しい（北川二〇〇六）。ワット・トロラエン・カエンでは計四点の碑文が発見されており、七世紀（K.137、K.766）、九世紀（K.432）、十一世紀（K.136）を示す。さらには、本堂の東面にはネアック・ター・トマリアアアと呼ばれるネアック・ター（祖霊神）の祠が設けられているが、この像は元々ドヴァアラヴァティー様式の倚像であることが明らかになった（Riviere 2016）。本堂の南には小高い丘状に盛り上がった地点があり、ここには砂岩製のアンコール期に属する屋根裝飾が見

られる。

ワット・トロラエン・カエンでは、近現代に入り改変が続けられ、現在でも年々境内が拡張し続けている。境内の南端に寺院によって近年に掘削された水路がある。この水路の断面には多くの陶磁器の堆積が露出していた。このため、この水路をトレンチと見なし、断面の陶磁器を採集した。当トレンチから出土した遺物は磁器五五点、陶器二二点、土器五八点である。特筆されるのは当トレンチから出土した貿易陶磁の殆どは中国陶磁であったが、肥前陶磁が四点確認されたことである。一六五〇年代から一六七〇年代に位置付けられる肥前染付の荒磯文碗に、特徴的なころとして一七世紀第三四半期頃の肥前の鉄釉瓶の底部片が出土した。中国青花は一六世紀初頭から中頃にかけての碁笥底小皿や連子碗に加え、一六世紀後半から一七世紀前半頃の景德鎮青花碗、漳州窯青花等が確認された。またクメール黒褐釉陶器壺片も相伴している。

当トレンチ出土遺物の年代観は一六世紀初頭から中頃にかけてのものを含みながら、一七世紀前半に及ぶものがその中心である。一方、一七世紀後半から一八世紀初頭にかけての遺物が一定量出土していることが大きな特徴である。前項にあげた中央地点トレンチからは肥前をはじめとした一七世紀後半に位置付けられる遺物が一切出土しな

かった事実とは対照的である。また、当トレンチからも明らかな焼土層や武器・人骨類が出土しなかったことも特徴である。

### 3-3. ロンヴェエーク域内表採遺物

ロンヴェエークでは多くの陶磁器を表面採集する事ができ、現在までのところ二三六三点が検出されている。遺物採集地点には偏りが見出されたことから主な遺物分布域を図7に図示した。

エリア1はワット・トローエン・カエンの東に広がる中小規模の上座仏教テラス寺院が分布し、トンレサップ川の氾濫原に東面する地域である。エリア2はロンヴェエークの重要寺院の一つとされるブレア・アン・テープを中心としたロンヴェエーク南東隅地点である。エリア3は南辺土塁の屈曲部にあたる地域、エリア4は南辺土塁中央部で上座仏教テラス寺院であるヴィヒア・バツコーを中心とした地区である。エリア5はロンヴェエーク南西隅にある出隅区域である。エリア6はロンヴェエーク北西隅地域であるが、採集した遺物量は少ない。エリア7は西辺第一土塁中央部付近である。エリア8はロンヴェエーク中央地点でレンガ工場周辺地域にあたる。エリア9はワット・トローエン・カエンである。エリア10はロンヴェエーク北東側のコンポン・ロン

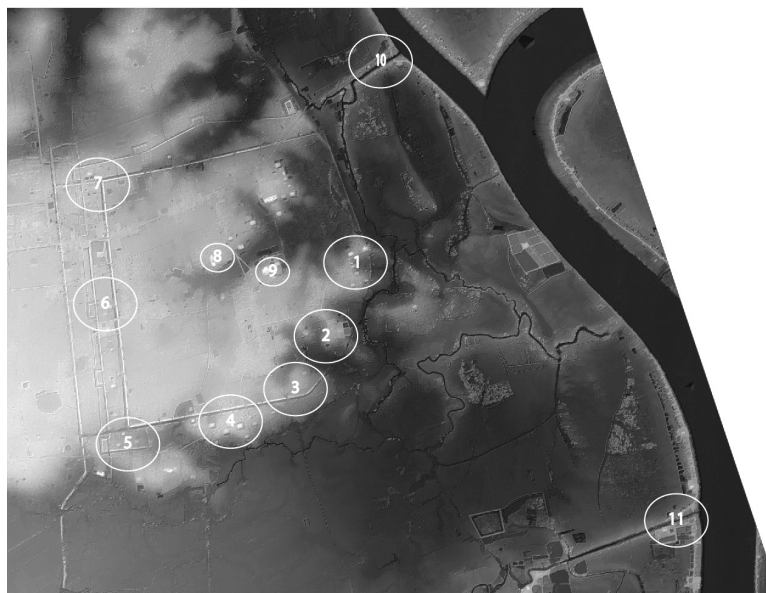


図7 表採遺物分布域

ヴェーク（ロンヴェークの港）と呼ばれる地域である。エリア11はロンヴェークの南、ウドン市域を流れるストゥン・克蘭・ボンレイとトンレサップ川の合流地点である。ロンヴェーク域外ではあるが、コンボン・ロンヴェークとの比較のため掲出する。

図8に表採陶磁器の一部を图示する。1はエリア4の南辺土壘中央から、2から5はエリア2の南東隅地点からの出土である。1は内底が饅頭心状に膨らむ唐草文で、高台内面には方形枠内で「精製」を表す銘が確認できる。2は海馬文碗で一六世紀前半ごろの連子碗である。3は青花碗片で外面体部には花卉文、内底見込には植物文が施される。高台内面には「永保長寿」銘が記されている。4は青花暗花文碗で、外面口縁部には唐草文帯、外面体部には暗花文が全体に施されている。その他青花片では、碗皿類の他、壺または罐の胴部または蓋片や、平形合子の蓋等も出土した。5はメナム・ノイ産黒褐釉壺口縁部片である。内外面とも黒褐釉が施されている。ロンヴェークではクメール黒褐釉陶器の他にメナム・ノイ等タイ産黒褐釉陶器が確認されているのが特徴である。

エリアごとに見ると、明らかにエリア2・3・4等南辺土壘周辺とエリア1のワット・トラエン・カエン東側地区の出土量が多く、北側や西側には総じて遺物が少ないこ

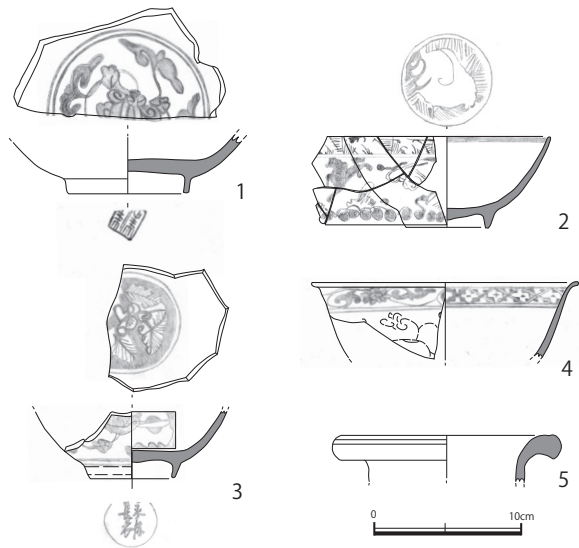


図8 表採調査遺出土陶磁器

とが判明した。今後更なる表採調査の必要があるが、現時点での傾向としては、台地の縁にあたる東側と南側に遺物が多いことから、この方面に居住域ないし商業の拠点や荷揚場となるような施設が存在していた可能性がある。

### 3-4. ロンヴェーク出土陶磁器の比較検討

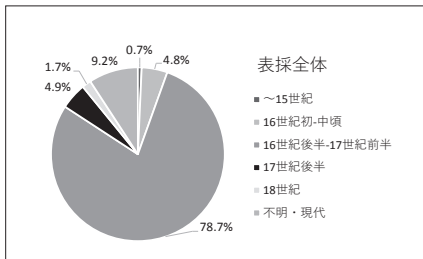
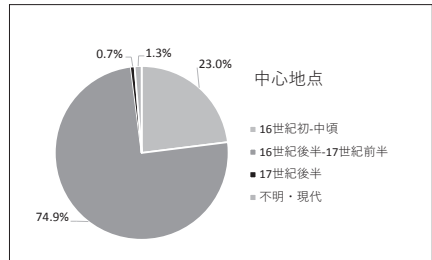
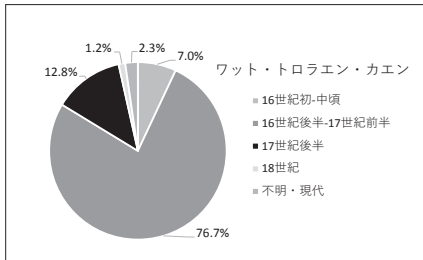
表採調査における各地点の陶磁器出土点数には地域ごとに差異が見られる(表3)。エリア8と9では表採可能範囲に限界があったため、相対的に見て遺物量は少ない。そのような例外を除くと、ロンヴェーク南辺土塁周辺や東側地域が他地点に比べて多いことが判明した。

#### 年代観

ロンヴェーク中央地点出土陶磁器の年代観は、一六世紀初頭から中頃のグループと、一六世紀後半から一七世紀前半に比定されるグループにほぼまとまることを確認した(表2)。一方、ワット・トラエン・カエンのトレンチ出土遺物は、中央地点と同様に一六世紀初頭から中頃のグループと、一六世紀後半から一七世紀前半までのグループが主体でありながらも、一七世紀後半に比定される肥前磁器や一八世紀の中国青花を確認する等、中央地点より下の時代まで確認できる結果となった。表採陶磁器はやはり、一六世紀初頭から中頃までのグループと、一六世紀後半から一七世紀前半のグループが主体、わずかに一七世紀後半以降のグループが確認された結果となった。

このように、ロンヴェークから出土した貿易陶磁器は一六世紀初頭から中頃のグループにはじまり、一六世紀後半

表2 陶磁器年代観比較表



から一七世紀前半にかけて遺物の出土量はピークを迎え、ワット・トローエン・カエンを含む一部地域で一七世紀後半以降の遺物が出土したこととなる。王朝年代記によれば、一五九四年にアユタヤによりロンヴェークは陥落し、都は遷されたということだが、本稿での分析の結果、少なくとも一七世紀前半期までは多くの遺物が出土していることから、王朝年代記のロンヴェーク陥落年代が仮に正しい場合でも、陥落後もロンヴェークは一七世紀前半頃まで使われていたことが指摘できよう。

### 器種組成

器種組成に関して表採調査各地点と発掘調査の二地点をそれぞれに比較検討する。碗・皿類等のテーブルウェア、壺・甕類のコンテナ容器、合子や瓶・ケンディ等の特殊容器を割合として表している(表3)。一見して明らかなのが、どの地点も圧倒的に碗・皿類が多く出土している点である。ここで特筆すべきなのが、中央地点では他地点に比べて上質・高級な陶磁器を多く含む点である。当地点はロンヴェークにおいて高位の身分の者が居住または利用する地点であったことが推察される。また、ロンヴェーク全体を通して、壺・甕類を突出して多く検出した地点は現状で発見されていない点については後章で詳述する。

表3 出土陶磁器器種組成一覧

	碗・皿類(点数)	壺・甕類	瓶袋物	合子
中央地点	77.4% (345)	11.2% (50)	9.2% (41)	2.2% (10)
ワット・トローエン・カエン	80.4% (70)	10.5% (9)	8.1% (7)	—
エリア1	85.3% (87)	11.8% (12)	—	2.9% (3)
エリア2	75.5% (480)	22.6% (145)	0.9% (6)	0.8% (5)
エリア3	81.7% (375)	17.6% (81)	0.7% (3)	—
エリア4	84.2% (388)	15.2% (70)	0.2% (1)	0.4% (2)
エリア5	72.9% (272)	23.1% (86)	2.7% (10)	1.3 (5)
エリア6	80.4% (37)	19.6% (9)	—	—
エリア7	80.7% (497)	18.8% (116)	0.2% (1)	0.3% (2)
エリア8	100% (4)	—	—	—
エリア9	57.5% (15)	38.5% (10)	—	3.8% (1)
エリア10	98.9% (87)	1.1% (1)	—	—
エリア11	100% (27)	—	—	—
表採全体	80.3% (1898)	18.1% (428)	0.8% (20)	0.7% (17)



## 4. ロンヴェーク時代の対外貿易

## 4-1. 史料からの検討

王朝年代記には残念ながらカンボジアによる貿易活動に関する記録は残されていない。しかしながら、外国による史料には少ないながらも一六世紀カンボジアに関する記録が残されている。

## ヨーロッパとの接触

「交易の時代」(Reid 1983)を迎えた一五世紀以降、アジア海域にポルトガル船や遅れてスペイン船が登場するようになった。彼らが残した記録には、当時の東南アジアについても記載されている。ヨーロッパ史料にはじめてカンボジアが登場するのはトメ・ピレスによる『東方諸国記』である(ピレス一九六六)。一五一〇年代、ピレスは実際にカンボジアを訪れることはなかったが、伝え聞くところとして、「カンボジアの国土は多くの米と良い肉、魚、地酒を産する。そして、この国には金がある。そして、漆、多くの象牙、干魚、米を産出する。そしてベンガル産の良質な白服、少しの胡椒、丁字、辰砂、水銀、蘇合香、赤真珠等…(中略)である。」一五五五年にはポルトガル人宣

教師ガスパール・ダ・クルスがロンヴェークを訪れ滞在する(クルス著・日笠編訳一九九六)。その後、一六世紀末から一七世紀にかけてはスペインとポルトガルからの宣教師や商人たちがカンボジアに滞在するようになったとみられる。しかしながら、一七世紀代のオランダ東インド会社の登場まで、カンボジアとヨーロッパ諸国との貿易品目に関する記録は今のところ殆ど見つからない。

## 日本との接触

一五六九(永祿二二)年、九州の沿岸にカンボジアの船が漂着した(岡本一九四二)。霊雲院に蔵される『頌詩』には大友氏とカンボジアの関係性を証明する書簡が二点書き写されている(鹿毛二〇一一、二〇一二)。一点目は一五七九(天正七)年に金書と献物を携えて豊後に向かったとみられるカンボジア船が薩摩に漂着したことを受け、島津義久が「南蛮国甘埔寨賢主君」に宛てた書簡である。そしてもう一通はその返信書簡とも受け取れる、「甘埔寨浮喇哈力汪加」から大友氏宛に送られた書簡である。この書簡には象、象簡、鏡匠、銅銃壱門、蜂蟬參百斤を贈る旨が書かれる。この「浮喇哈力汪加」という名前は「プレア・リアチア(Preakh Reachea)」とこう王に付く敬称であると考えられる。王朝年代記の年代が正しければ、バロム・

リアチア王（一五六六一一五七九）やサター王（一五七九一五九五）の時代で、まさにロンヴェーク期である。カンボジア国王は、遠く日本の大友氏と直接交渉をし、交流をおこなっていたことは注目すべき事案である。

朱印船・唐船貿易が盛んとなる一七世紀に入ると、当期カンボジアと日本間の貿易関連史料が増加する。一六〇四（慶長九）年から一六三五（寛永一二）年までに、カンボジアへ渡航した朱印船は四四隻、鎖国令発布以降は唐船による貿易が活発となり、カンボジア船として記載されるのは一六四一（寛永一八）年七月三日から一七四五（延享二）年四月一日までの四一隻である。日本とカンボジア間で展開された唐船貿易による主なカンボジアの輸出品目は鹿皮、蘇木、砂糖、そして漆である（永積一九八七、佐藤二〇〇九、北川二〇一五）。

一方、朱印船貿易開始以前である一六世紀代における対日本貿易の具体的な内容は残念ながら現段階では示すことができない。ただ、一七世紀に入った直後の一六〇四年に五隻もの朱印船がカンボジアへ渡航していることを鑑みると、一六世紀代後半には既に貿易活動が執り行われていたことが推察される。

#### 4-2. 考古資料からの検討 豊富な量の陶磁器

上述したように、カンボジアの年代記である王朝年代記は後世に編纂されたもので同時代史料とはなりえない。さらには一六世紀代の史料に関しては、貿易品目を具体的に記載するような史料は残念ながら残っておらず、ポルトガルやスペインの宣教師・冒険家による記録、また大友氏との書簡が貴重な同時代史料となっている。カンボジアに関する貿易史料は、一七世紀に入ってからオランダ東インド会社、また日本による朱印船・唐船貿易の記録の登場を待たねばならない。一方、遺跡から出土する考古資料は史料不足を補い、一六世紀に行われた貿易をモノの形で証明してくれる。ロンヴェークに関しては、発掘調査、表探調査双方から非常に豊富な量の陶磁器が確認されたのは第三章までで詳述したとおりである。実際に多くの貿易陶磁器がロンヴェークから出土したことは、少なくとも当該期カンボジアが中国等諸外国から陶磁器を輸入していたことの証明であることは明らかである。とりわけ、中央地点出土遺物に見るように高級品や特殊遺物も確認されたことは特筆される。上質な景德鎮産青花や白磁特殊容器、吉祥文蓋付褐釉壺等は、おそらくは一般階級の居住域に属するものではなく、王族や高位官僚等一定以上のステイタスを持つ階級

に属するものであったのではと考えられる。これはすなわち、当該期ロンヴェークが相応の財力を有し、積極的に貿易活動を行っていたこと示唆している。

### コンテナ容器のヴァリエーション

次に、黒褐釉陶器の問題である。ロンヴェーク北東一五kmほどに位置する克蘭・コー遺跡では、墓葬遺跡で完形の陶磁器が数多く発見された。この中で、一五世紀後半から一六世紀初頭の明青花、タイ青磁、ミャンマー青磁、ベトナム青磁に加えて一定量のクメール黒褐釉陶器が出土していたが（佐藤二〇一二）、ここではタイ産黒褐釉陶器は出土しなかった。一方、ロンヴェーク期に入ると、ロンヴェーク中央地点やワット・トロラエン・カエン等で一定量のクメール黒褐釉陶器を検出した一方で、シーサッチャナライやメナム・ノイ産の黒褐釉陶器が入り始める（図8-15）。これまでアンコール王朝末期にクメール陶器生産は終焉を迎えると思われるが、ロンヴェークや克蘭・コー遺跡で出土したクメール黒褐釉陶器の存在により、クメール黒褐釉陶器生産の下限年代に関する議論（佐藤二〇一六）が提起された。ただ、今回新たにロンヴェークにはアンコール期に遡る痕跡を多く残すことが判明しつつあり、当該クメール黒褐釉陶器がアンコール期に属する

ものであるという可能性も考えられた。しかしながら、クメール黒褐釉陶器が発掘トレンチ中の一六世紀後半に比定される層から確認されていることから、少なくともロンヴェーク期に至るまで使用されていたことが改めて明らかとなった。今後、クメール黒褐釉陶器生産に関しては、生産地・下限年代双方の視点から更なる調査を要する。

一方、ロンヴェークから出土するタイ産陶器がもとと壺・甕類に入れられた内容物を目的として輸入していたのか、それともあくまでコンテナ容器として使用するために輸入したのか疑問が残る。ここで再び、エリアごとに示した器種組成を検討すると（表3）、遺物の絶対量が少なかったエリア9と中心部のエリア10、11を除き、総じて一五%から二〇%前後が壺・甕類で占められており、突出して大きな値を示す地点があるわけではない。このことから、例えばカンボジアの産品を輸出するための容器として、タイ産陶器を大量に輸入またはクメール陶器を大量に保管・貯蔵した遺構や地区の存在を見出す事が現段階では出来ていないこととなる。今後、当該期カンボジアの貿易内容を読み解く一つの重要な手掛かりとして留意しておく必要がある。

ロンヴェークにおける容器としての陶磁器として、一般的に利用されていたと考えられるのが、最も大量に出土し

ている土器である。容器としての土器として重要な発見例の一つに、ロンヴェーク中央地点で過去に出土した内面に黒色の漆が付着した在地土器の丸底壺片がある(図9)(佐藤二〇一六)。このような漆附着土器は多くはないがこれまで二〇点ほど出土している。第4章で述べた通り、日本にとって漆といえは、一七世紀以降の主要な輸入先のひとつがカンボジアであった(川口二〇一八)。一六世紀には現段階で述べることはできない。今回ロンヴェークから出土したこの漆附着土器は、地元または短距離圏内で使用するためのもので、日本等長距離輸向けではない可能性も大きい。今後は漆等を入れる容器としての土器に留



図9 中央地点出土漆附着土器

意しながら調査を進める必要がある。

## 5. 考察

本稿では、衰退の時代と考えられていたポスト・アンコール期の王都ロンヴェークにおいて豊富な量の貿易陶磁器を検出し、それらの貿易陶磁器が一六世紀から一七世紀前半までの時間幅を持つことを明らかにした。一六世紀にカンボジアはヨーロッパと接触し、さらには日本との交渉を行う等、積極的な外交展開をしていたことが史料から判明した一方、具体的な貿易品に関しては史料からは見出す事が出来なかった。ここでは、出土貿易陶磁器群からみだ当該期カンボジアの対外貿易活動について考察したい。

### 5-1. 港市としてのロンヴェーク

前章まででロンヴェーク表採遺物では南辺土塁周辺やワット・トラエン・カエン東側地区で遺物量が相対的に多かったことを指摘した。このことから、居住域や商業関連地区の可能性を挙げたが、現段階では住居跡や荷揚場・港跡等の遺構を検出したわけではない。ここでLIDARによる地図を今一度検討したい(図2)。ロンヴェーク南辺土塁東端部からプレア・アン・テープにかけ

えよう。

## 5-2. 貿易窓口の移動

さて、上述のヨーロッパ史料でも取り上げたが、ロンヴェーク期にはポルトガル人をはじめとしたヨーロッパ人宣教師がカンボジアに滞在したが、当時は外国人居留区という明確な区分が存在したという記録は見当たらない。

の地区は、台地の末端部にあたり、リアス式海岸のように入り組んだ地形を呈している。乾季には台地下の部分は水が殆ど引き、雨季にはこの台地の縁まで水位が上がらる。さらに、コンポン・ロンヴェークから続く水路はロンヴェークの台地を巡るように張り巡らされている。一五五五年から一五五七年にかけてキリスト教布教のためにカンボジアに滞在したガスパール・ダ・クルスによれば、「ポルトガル人たちは、ロエタにおいて、野原の中の非常に高い盛り土を私に示した。その盛り土の上で、彼らは次のように確言したのである。増水の時期にはこの地で作られた船一隻が（この盛り土に）触れることなく通過していたものだ。その船たるやインディアからポルトガルまですら立派に航行できようかと思われたほどだ、と。」（クルス著・日埜編訳一九九六）。すなわち、雨季には外洋を航海でき、規模の大型船がトンレサップ川を遡上しロンヴェークの地までたどり着いていたということを示唆している。おそらくこのようなトンレサップ川を遡上した大型の貿易船から荷下ろしされた品々を小船に載せてコンポン・ロンヴェークから台地の縁を巡る水路を使い、台地東縁や南縁からロンヴェーク内に荷揚げしていたのではないだろうか。今後、更なる調査が求められるが、地の利を存分に生かし、ロンヴェークは外国との貿易を拡大させたことが伺

王朝年代記では一五九四年にアユタヤによりロンヴェークは陥落、スレイ・サントーに王が逃れ、一六二〇年にチェイ・チェッタ王がロンヴェークの南二〜三kmのウドンに遷都したとされる。一七世紀前半にはウドンから程近いトンレサップ川沿いのポニャ・ルー（Ponhea Leu）地域に前後一〇キロにわたり日本人、ポルトガル人、中国人、コーチシナ人とカンボジア人の町が発達していたとされ、一六一八年には日本人キリシタン七〇名が既に教会堂を建設していたという（岩生一九六六）。これはすなわち、カンボジア王朝年代記が述べるところの一六二〇年ウドン遷都以前に、ポニャ・ルー地域が外国人居留区となり、ここで諸外国人が主に貿易業を営んでいくことになる。ロンヴェーク陥落のちも、ウドンからポニャ・ルーにかけての地域で対外貿易が継続し、外国人居留地を設けるほど盛んに貿易が行われたことを示唆している。

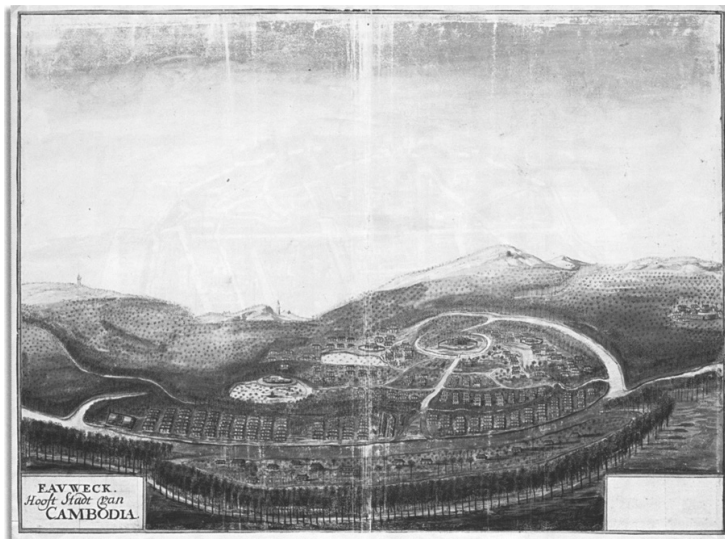


図10 17世紀オランダによるロンヴェーク周辺絵地図 (Muller 1917)

一七世紀の史料にはなるが、オランダによる文献にロンヴェークの絵地図が残されている(図10)(Muller 1917)。トンレサップ川の東岸から鳥瞰図のようにロンヴェークとウドンを望んだ図である。トンレサップ川は画面手前の右から左へと流れ、トンレサップ川から画面奥に流れる川がストウン・クラン・ボンレイとみられる。絵図の右端にある城塞風のものがロンヴェーク、中央付近が一七世紀の都ウドン周辺と考えられている。トンレサップ川岸に多くの建物が立ち並んでいるのが見て取れるが、ここが日本人町やオランダ商館をはじめとした外国人居留区が存在したポニャ・ルー地域にあたるとみられる(岩生一九六六、北川二〇〇六)。

ここで改めて出土陶磁器を検証したい。ロンヴェーク出土貿易陶磁器は、一六世紀後半になり遺物量が急増しており、おそらく港における陶磁器取引量そのものも同様に増加していたことが見込まれる。陶磁器以外の物品に関しては、考古遺物から検証することが現状では困難であるが、一七世紀以降になると日本・カンボジア間貿易品目を見る限りかなり多様化することが分かる(永積一九八七)。表採エリアIIのストウン・クラン・ボンレイ河口付近の遺物は一六世紀後半から一七世紀前半の遺物群も確認されているが、一七世紀後半から一八世紀代にかけての遺物が最



も多く、コンボン・ロンヴェークやロンヴェーク全体の遺物の年代観からは一段階下がる時期を示している。地理的には、ストウン・克蘭・ポンレイから南にかけての地域が外国人居留地であるポニャ・ルー地域とされる。この川は幅三五mほどあり雨季には深度も増すことから小型船で西に進めば、一七世紀以降の王都ウドン地域に辿り着く。

一六世紀はコンボン・ロンヴェークから直接またはロンヴェークを張り巡らした小川状の水路を利用し、貿易品を荷揚げした。つまりここではロンヴェークが都と貿易窓口を兼ねていたと言えるが。一方、一七世紀後半以降はポニャ・ルー地域へと貿易窓口が南下した。トンレサップ川を遡上した大型船から貿易品をポニャ・ルーで積み替え、ストウン・克蘭・ポンレイ沿いにウドンまで物資を運び入れる構造に変化した可能性が提起できる。

### 5-3. 結語

ロンヴェークにおける考古学的調査により、豊富な量の一六世紀から一七世紀前半を中心とした陶磁器が出土した。ロンヴェークはメコンデルタのある海岸線から二〇〇kmも内陸にあり、一見、対外貿易には不利に見えるが、上述の通り、外洋を航海する大型船はメコン川とトンレサップ川を遡上し、直接ロンヴェークのあるトンレサップ川西

岸に到着することができた。一五世紀以降に世界的に展開された「交易の時代」(Reid 1988)の流れにうまく乗り、一六世紀にロンヴェークは豊富な陶磁器を輸入しうるだけの財政力を備え、日本の九州まで王の書簡を携え船を派遣するほどに積極的な外交を展開していたことが判明した。

一方、ロンヴェーク出土貿易陶磁から導き出された一六世紀から一七世紀前半期という年代観は、一つの疑問を提起した。つまり、王朝年代記が説くところの一五九四年アユタヤによるロンヴェーク陥落が、現段階では明瞭な画期として考古資料から読み取る事が出来ないことが新たに判明したのであった。更には、ロンヴェークにおけるこれまでの考古学的調査からはロンヴェークが焼け野原と化すような戦争の痕跡は見つかっていない。一五九四年のロンヴェーク陥落に関する実証的な調査が今後必要である。

その後、一七世紀後半に入るとロンヴェークでは遺物量が急激に減少した。この時期にはストウン・克蘭・ポンレイ河口出土遺物が増加することから、ポニャ・ルー地域に貿易の窓口が南下した可能性を示唆でき、ウドンへの遷都と連動している可能性を示唆できる。今後、更なる調査を続けロンヴェークからウドンへの遷都に関し、遺構・遺物双方の史料を充実させ詳細に検討する必要があるだろう。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、大橋康二先生、續伸一郎先生にはロンヴェーク出土遺物に関しまして多大なるご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。また、長年にわたりご指導いただいている田畑幸嗣先生には感謝申し上げます。現地調査において、カンボジア文化芸術省の H.E. Dr. Phourn Sakona 大臣はじめ関係者の方々、日本出土資料、カンボジア現地資料に関して多くの方にご高配を賜りました。末筆ながらここに記して御礼申し上げます。川口洋平・北川香子・Damian Evans and CALLI, Heng Sophady, Martin Polkinghorne, Prak Sonara, Youen Vuthy.

## 註

- (1) ロンヴェークにおける考古学的調査は奈良文化財研究所とカンボジア文化芸術省は平成二二年度から二四年度採択文化庁伝統文化課所管、文化遺産国際貢献事業(文化遺産国際協力拠点交流事業)、「カンボジア・ウドン遺跡及びロンヴェーク遺跡等の保存に関する拠点交流事業」、平成二六年度から二九年度科学研究費助成事業基盤研究(B) 研究代表者杉山洋「アンコール王朝末期に関する総合的歴史学の構築」ならびに二〇一七年度採択サントリー文化財団研究代表者田畑幸嗣「前近代日本Ⅱカンボジア間交流史のポスト・アンコール期の王都ロンヴェークと対外貿易

構築・出土陶磁器と日本Ⅱカンボジア書簡に基づく歴史・考古学研究」により遂行された。平成二七年度からはカンボジア文化芸術省、オーストラリア・フリンダース大学と共同でロンヴェークの発掘調査にあたっている。

- (2) LIDAR 画像はCambodia Archaeological LIDAR Initiative に<sup>48)</sup>。LIDAR (Light Detection and Ranging) とは上空から地上に向けてレーザー光を照射し、得られる起伏データから地形図を作成する方法である。

## 参考・引用文献

- 岩生成一 一九六六 『南洋日本町の研究』岩波書店  
鹿毛敏夫 二〇一一 『日本「九州大邦主」大友氏と中国舟山島』『アジアン戦国大名大友氏の研究』、一七四―一八七頁  
鹿毛敏夫 二〇一二 『戦国大名の海洋活動と東南アジア交易』『交易陶磁研究』一三―三三頁  
クルス、ガスパール・ダ著 日笠博司編訳 一九九六 『中国誌』  
川口洋平 二〇一八 『大航海時代とモノづくり日本―技術と材料、そして貿易―』『国立歴史民俗博物館研究報告』第二一〇集、一八七―二〇二頁  
北川香子 一九九八 『ポスト・アンコールの王城―ロンヴェーク

- クおよびウドン調査報告―』『東南アジア―歴史と文化―』  
二七、四八―七二頁
- 北川香子 二〇〇六 『カンボジア史再考』 連合出版
- 北川香子 二〇一五 「ヨーロッパの船が河を遡ってきた頃―  
一七世紀カンボジア史再考―』『南方文化』 第四一輯
- 堺市立埋蔵文化財センター 二〇〇四 『堺環濠都市遺跡発掘  
調査概要報告：SKT二六三・甲斐町東二丁』
- 佐藤由似 二〇〇九 「ポスト・アンコール期カンボジアにお  
ける陶磁器流通―ポニャ・ルー地域出土陶磁器の組成分析  
をもとに―』『東南アジア考古学』二九、一三―二二頁
- 佐藤由似 二〇一二 「クラン・コー遺跡検出墓壙と出土遺物  
の検討』『東南アジア考古学』三二、六一―七三頁
- 佐藤由似 二〇一六 「中近世カンボジア王都周辺地域における  
陶磁器の需要と流通』『陶磁器の考古学』第四巻、二〇七―  
二二八頁
- トメ・ピレス著、生田滋ほか訳注 一九六六 『東方諸国記』  
岩波書店
- 長崎市教育委員会 一九九七 『築町遺跡：築町別館跡地開発  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市教育委員会 二〇一一 『興善町遺跡：民間病院建設に伴  
う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 永積洋子 一九八七 『唐船輸出入品数量一覧 一六三七―一八三三  
三年』創文社
- 山脇悌二郎 一九八八 「交易篇―唐・蘭船の伊万里焼輸出―』  
『有田町史商業編Ⅰ』有田町史編纂委員会、二六五―四一  
〇頁
- Cœdes, G. 1942 Inscriptions du Cambodge II. EFEO, Paris.
- Cœdes, G. 1954 Inscriptions du Cambodge VI. EFEO, Paris.
- Gaucher, J. 2004 Angkor Thom, une utopie réalisée?  
Structuration de l'espace et modèle indien d'urbanisme  
dans le Cambodge ancien. Arts Asiatiques. Tome 59. Pp  
58-86.
- Groslier, B. P. 1958 Angkor et le Cambodge au XVIIe siècle  
d'après les sources portugaises et espagnoles. Paris Press  
universitaires de France.
- Leclère, A. 1914 Histoire du Cambodge depuis le Ier siècle de  
notre èra. d'après les inscriptions lapidaires, les annales  
chinoises et annamites et les documents européens des six  
derniers siècles. Paris: Paul Geuthner.
- Mak P. 1984 Chroniques royales du Cambodge (des origines  
legendaires jusqu'à Paramarājā Ier). Traduction française  
avec comparaison des différentes versions et introduction.  
Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Mikhaelian, G. 2009 La royauté d'Oudong. Réformes des

- institutions et crise du pouvoir dans le royaume khmer du  
xvii<sup>e</sup> siècle. Paris: Presses de l'Université Paris-Sorbonne.
- Mikaëlian, G. 2012 Des sources lacunaires de l'histoire à  
l'histoire complexifiée des sources. *Éléments pour une  
histoire des renaissances khmères* (c. XIV<sup>e</sup>-c. XVIII<sup>e</sup> s),  
Péninsule, n° 65, (2) [juin 2013]: 259-304.
- Muller, H. P.N. 1917 *De Oost-Indische Compagnie in Cambodja  
en Laos*. 'S-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Reid, A. 1988 *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450 -  
1680*. Vol. 1: *The Lands Below the Winds*. New Haven: Yale  
University Press.
- Riviere, N. 2016 « L'habit ne fait pas le moine » : note sur  
un Buddha préangkorien sis à Longvek (Cambodge) et  
accouré en Neak Ta. *Arts Asiatiques* Tome 71.
- Sok, K. 1988 *Chroniques royales du Cambodge* (de Bañā Yāt  
jusqu'à la prise de Lanvaek: de 1417 à 1595). Traduction  
française avec comparaison des différentes versions et  
introduction. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Vickery, M. 1977 (annotated 2012) *Cambodia After Angkor:  
The Chronical Evidence for the Fourteenth to Sixteenth  
Centuries*. PhD Dissertation. Ann Arbor: University of  
Michigan.